

このレポートは、前回の「76 現代の「荒す憎むべき者は」未だ現れていないという根拠」という記事の続編という位置づけになります。



「ものみの塔」潰すに刃物は要らぬ
[塔]99/5/15とマタイ24:30だけあればいい

この2つがショートしたときに爆発／崩落が始まります

マタイ24:30が明らかにしていること
大患難のすぐ後、キリストの臨在

「ものみの塔」の爆弾宣言
大患難はまだ起きていなかった。
1914年にキリストの臨在

マタイ24:30が明らかにしていること

「…それらの日の患難のすぐ後に、太陽は暗くなり、月はその光を放たず、星は天から落ち、天のもろもろの力は揺り動かされるでしょう。またその時、人の子のしるしが天に現われます。」
(マタイ 24:29 - 30)

「ものみの塔」の爆弾宣言

「…対型的な『大患難』は西暦1914年に始まったのではないことが分かります。むしろ、1914年から1918年にかけて、現代の対型的なエルサレムに生じた事柄は、『苦しみ
の劇痛の始まり』にすぎませんでした。…二度と起きないような『大患難』はまだ先のことです。
それは、偽りの宗教の世界帝国（キリスト教世界を含む）の滅びを意味しているからです。
それに続いて、ハルマゲドンにおける『全能者なる神の大いなる日の戦争』が起きるのです」。
要するに、大患難は始めから終わりまで、まだ先のことだったのです。」

—塔99 5/1 15 ページ 10—12節

一応、確認のために、マタイ24:30が、いつのことを述べているかという、ものみの塔の正式教理を紹介しておきましょう。

「人の子が力と大いなる栄光を伴い、天の雲に乗って来るのを見るでしょう。そして彼は、大きなラッパの音とともに自分の使いたちを遣わし、彼らは、四方の風から、天の一つの果てから他の果てにまで、その選ばれた者たちを集めるでしょう」。(マタイ 24:3, 30, 31)

このイエス・キリストの「臨在」はいつ始まりましたか。

イエスの「臨在」は、異邦人の「七つの時」が終わった1914年の秋に始まりました。」

— 塔84 9/15 14ページ 15,16節

なぜこういうことが起きてしまったのかということですが、それは、「1914年臨在開始説」教義の発展に大きな落とし穴があるということです。「1914年」はそもそも「開始」の時ではなく「最後」のとして理解され、宣言されたものでした。

当初は「1874年」にハルマゲドンが始まり、1878年にキリストは王位に就いた。そして1914年に、「異邦人の時」が終わり、その時、諸政府と「大いなるバビロン」は滅びる。

と、されてきました。そして、その年に自分たちは天に上げられると考えていましたので、その後のことは何も考えていませんでした。

そして、待望の1914年が近づくと連れ、何事もなさそうなので、諦めかけたところ、やおらその年の夏に第一次世界大戦が勃発しました。期待していた事は何一つ起きませんでした。その年に歴史的な一大事が起きてしまったのが運命のいたずらです。

しかしこの「1914年」もその後の進展でたちまち捨てられることとなります。戦争が終わってしまったからです。問題はここからです。

「『1914年』は間違っていなかった」という大前提のもとに、あらゆる教理が構築されてゆく事になります。そして、全ては「1914年」に始まったということで、聖書中の記述をそれ以降の出来事に片っ端から当てはめてゆく事になります。

その中には、当然主要な事として「大患難」があります。「1914年」「大患難」「臨在」これが「ものみの塔」独自の教理の柱でありこの1セットに基づいて、今日まで続くあらゆる解釈が誕生しました。その後、時代の進展と共に、次々に脱落してゆく教義がでてきました。

そのうちの大きなものは、例えば、「世代」の教理の変更でしょう。

中でも、もっとも重大なのは、「大患難」でしょう。今なお「大患難の真っ最中です」とはさすがに言い続けられなくなったため、「1セットの柱」の内の1本を抜いて「将来」に持ってっちゃいました。ほとんどの教理を支えていた前提を一つ否定してしまったのですから、他に影響が出るのは当たり前です。

ともかく「大患難の後」にキリストの臨在があるという聖句は、福音書の平行記述からも明らかであり、「大患難」と「臨在」を切り離して、別々の場所(時)にもってゆくこと自体がすでに論外で、どこかへ移す以外、現実の歴史との矛盾は消えないと認めたとであれば、当然、一緒に、その順番通りに、移さねばならないのは判りきったことです。

「大患難」の直後に起きるはずのキリストの「臨在」を、「1914年」に起きたとし、「大患難」については「要するに、大患難は始めから終わりまで、まだ先のことだったのです。」というのは、確かに未だ、何も成就してはいないのでそれは事実ではありますが、極めてゆゆしい、致命的な爆弾発言だったことに、協会内部の人々は気付いてさえいないのでしょうか。

ともかく、この「時限爆弾発言」はその意味するところの本当の意味に気付いた人から順番に、爆発／崩落をもたらすこととなります。